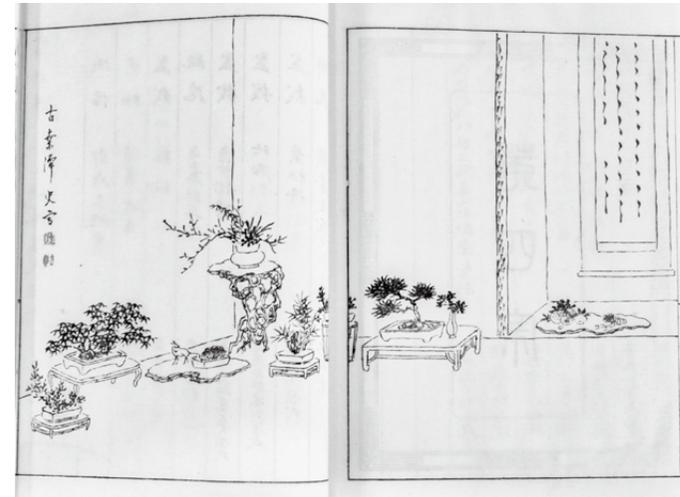


8月
【収藏品紹介】
煎茶会図録①

江戸時代末期から京都・大阪を中心に、文人（詩書画を趣味にする人）たちによって、煎茶会が盛んに開催されるようになり、煎茶会の様子を写入して記録した煎茶会図録が残されており、その中に盆栽も登場します。当館では、盆栽の記載があるものを中心に煎茶会図録



『角山簪翁薦事図録』 第四席

を収集しており、これらをもとに煎茶会における盆栽について、調査研究を進めています。

ここでは、明らかになってきた傾向について、開催地となった大阪・京都・東京の地域ごとに3回に分けて紹介していきます。今号は、初の大寄せの茶会として知られる大阪で開催された煎茶会図録（表参照）を取り上げます。

まず、煎茶会図録に登場する盆栽の種類に注目すると、文久3年刊行の『青湾茶会図録』では、「石菖蒲」（セキショウ）が3点と最も多く、竹や蘭が盆栽として出てきます。明治時代以降の煎茶会図録においてもセキショウや竹、蘭の盆栽が見られますが、大正時代になると盆栽全体に占める数が減り、代わりに松や種々の雑木盆栽が登場します。明治から大正へと時代を経るにつれて、樹種が豊富になっていったことがわかります。

続いて盆栽の記載方法に注目すると、『青湾茶会図録』では、「盆栽 交趾窯。白磁方盆。養湖石小竹。有檀坐」というように、盆器・植物・台座（卓）しよくの順になっています。明治9年刊行の『青湾茗醺図誌』でも、「盆栽 青磁盆裁 黄薑微置於紫檀卓上」というように、盆

器・植物・卓の順で表記されています。植物の前には、「養」や「栽」、「植」などの動詞が付き、補足として盆器に植えられた植物名を加えています。この記載法からは、盆器が主体であり、植物はそれに付随するものであったことがうかがえます。

また、明治13年刊行の『直入翁寿筵図録』においても、「盆栽 松盆高麗窯白磁」というように、盆器の産地についての情報に加えられており、煎茶会においては舶来の盆器に価値が置かれていたことがわかります。一方、表記の順番に着目すると、この図録では、植物・盆器の順で記載され、「養」や「植」、「栽」に植物名を続けるという表現はされません。明治16年刊行の『分史翁薦事図録』は表記が植物のみであり、以降の煎茶会図録では、植物・盆器の順番で表記される場合がほとんどです。このことから、明治10年代には、盆器から植えられた植物へ認識・鑑賞の主体が移っていったと考えられます。大正時代になると、完全に植物・盆器・卓の順番で表記されるようになります。更に、『雨竹居士薦筵図誌』では「懸崖真柏 鉢均窯袋式 置於紫檀方式卓上」と記載され、盆栽の樹形や卓の

大阪で開催された煎茶会の図録

通番	書名	製作者・版元	発行年代		会場	概要
1	「青湾茶会図録」	蔵梓：田能邨 執事：煙嵐社、白頭者、随意社	文久3年	1863年	網島	売茶翁高遊外の百年忌と「青湾之碑」建立を記念して開催。文久2年4月23日開催の「青湾茶会」と、同年7月16日開催の「後青湾茶会」の図録。
2	「青湾茗醺図誌」	編集・蔵梓：山中吉郎兵衛	明治9年	1876年	青湾	山中簪堂2代目山中基地兵衛の追薦のため開催。祭主は長男の3代目吉兵衛（天山山中簪堂）、次男吉郎兵衛（角山山中簪堂）、三男（養子）の與七（高山山中簪堂）。
3	「直入翁寿筵図録」	編集：田能村順之助（小斎） 蔵梓：直入山房	明治13年	1880年	広岡氏別荘地	田能村直入の長寿祝いのため明治10年3月11日に開催。
4	「分史翁薦事図録」	編集：加島信成 出版：小西平兵衛（吉祥堂）	明治16年	1883年	網島・片街	唐物商・小西文史翁の一周忌のため、息子則明が明治15年5月14日に開催。
5	「豫章堂茗醺図録」	著作：阪田圭蔵（習軒） 発行：松山與兵衛	明治42年	1909年	松山卓爾宅	大阪の骨董商である豫章堂初代與兵衛の百年忌のため、松山卓爾が自宅で明治41年9月に開催。
6	「雨竹居士薦筵図誌」	柳川善左衛門	大正2年	1913年	船場の堺卯楼	骨董商・柳川雨竹堂が先考追薦のため、明治42年5月7日に開催。
7	「角山簪翁薦事図録」	編集：山中簪堂 発行：山中吉郎兵衛	大正11年	1922年	網島の鮎字楼・藤田氏旧邸	角山翁（山中吉郎兵衛）の三回忌のため、大正8年11月3日に開催。

情報が詳細になる傾向が見られます。卓の情報は記載にばらつきがありますが、時代を経るに従い、盆栽や卓への関心が高まっていったという傾向がうかがえます。

最後に盆栽が飾られている席（部屋）の種類に注目してみます。『青湾茶会図録』では、小室や副席が3、前席が1、茶席が1となっており、文房や香道具と一緒に飾られることが多いようです。挿絵を確認すると、茶席では屋外に盆栽が飾られており、煎茶道具つまり喫茶の場と同一の空間内に盆栽は置かれていません。『青湾茗醺図誌』でも、盆栽が飾られる場所は屋外や縁側が多く、茶席と同一空間に盆栽が飾られている事例は1つだけです。このことから、盆栽は喫茶の場の設えというよりも、文人文化を構成する文物の一つとして、飾られていたと考えられます。しかし『直入翁寿筵図録』以降になると、盆栽が茶席内に飾られる事例が増えま

す。また、書画展観席にて盆栽を陳列するようになり、更には「盆栽陳列席」や「盆栽展観席」など、盆栽をメインに飾る席が登場し、大正時代まで続きます。明治10年代頃から喫茶空間の中に文人の世界観を象徴する文物として取り込まれ、次第に盆栽単体でも展観の主題として成り立つようになったといえます。明治時代になると、煎茶会は茶事を行うのみでなく、博覧的な側面も持つようになり、盆栽もその一つとして鑑賞されるようになったと考えられます。

以上のとおり、大阪地域の煎茶会図録から、盆栽について一定の傾向が読み取れました。大宮盆栽美術館では、令和5年度特別展「煎茶と盆栽」「盆栽」の夜明け」を令和6年2月10日から3月20日まで開催予定です。特別展に向けて、煎茶会図録を基に研究を進めていくことを思っています。

（当館主事 立石真雪）

【参考文献】

- 全日本煎茶道連盟監修「煎茶 道徳としての知識」株式会社婦人画報社、1992年
- 日本盆栽協会編「盆栽大事典」(同朋舎出版、1983年)
- 榎本聡子「煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究」(名古屋工業大学博士論文、2021年)
- 藤和善・榎本聡子・濱田晋一「煎茶会図録の書誌的考察―煎茶会図録による煎茶席の空間と特性に関する研究その1―」(日本建築学会計画学論文集「第84巻第7号」号、2019年1月)